

医案



月経病

1. 月経時の発熱

月経時の発熱は、一般に内傷に属していることが多い。外感の場合には必ず表証があり、発熱も内傷の場合ほど規則的ではない。臨床においては、本症の多くは陰虚火旺に属しており、どの症例にも潮熱がみられる。しかし、なかには肝熱の実証もあるので、以下にその典型的な症例を紹介しよう。

■ 症 例 ■

患 者：于〇〇，21歳，未婚，労働者。

初 診：1962年2月9日

主 訴：患者は普段からおとなしく寡黙であり，もともとの月経周期は短く，期間が非常に長い。1961年8月からは月経が20日に1回来るようになり，高熱・胸満・脇脹などの症状を伴い，ひどいときには嘔吐するようになった。10日経って月経が終われば熱も下がるが，毎月このような経過を規則正しく繰り返している。また発熱症状が次第に悪化していき，安徽省宿東の某病院で診察を受けたときには，40度もの高熱が出た。ほかに心煩・めまい・顔面紅潮・目の充血などの症状を伴い，ひどいときには昏厥して1時間目覚めなかったこともある。以前に病院で治療を受けたが効果がなく，患者は脅威を感じている。1962年2月上海に戻ったのを機に，治療を求めて来院した。初診時は月経の直前であり，気持ちが塞ぎ込み，胸悶・脇脹・口と鼻の乾燥・脈弦数などの症状がみられた。

弁 証：患者は普段から性格がおとなしいために、思い通りにならないことがあると抑うつが起き、肝鬱から気滞を生じたのである。このような現象は月経時にさらに顕著になるので、肝脈が分布する脇部が脹満する。また肝木鬱になれば横逆して土を克するので、胸悶・嘔吐なども発生する。また肝木には相火があるので、肝木鬱が長引けば火に変わり、高熱を引き起こす。そして火は燃え上がって、めまいを引き起こし、昏厥する場合もある。その症状から、肝熱型の月経時発熱と診断した。

治 法：疏肝清熱

処 方：柴胡4.5g, 青陳皮(各) 4.5g, 当帰身6g, 赤芍6g, 枳殻4.5g, 製香附9g, 炙甘草3g, 白朮6g, 川朴2.4g, 青蒿6g, 黄芩9g

上記の処方は、柴胡疏肝散（『筆花医鏡』第二巻、肝部。柴胡・陳皮・川芎・赤芍・枳殻・香附子・炙甘草）を基本にし、月経が近かったので、動血を防止するために川芎を当帰身に換えている。また胸悶してすっきりせず、舌苔が膩であることから、湿熱が体内に内蘊しているものと思われたので、白朮・青皮・川朴を加えた。また熱症状が次第に強くなってきていることから、青蒿・黄芩を加えている。こうすれば、肝熱を清解し、気鬱を疏通し、寛胸和胃して嘔吐を防ぐことができる。

再 診：薬を服用したときには月経が始まっていたが、2剤を服用しても効果が認められなかった。熱の勢いが強く、燥熱のために口や鼻は噴火しているかのようであり、めまいがし、熱厥現象に移行しようとしていた。

弁 証：肝火が肝経を伝って直接頭頂部に上昇して、動風が起きている。

治 法：上記の処方に釣藤鈎18g（後下）を加えて平肝熄風するとともに、清熱効果を強化した。

予 後：2剤を服用すると、本人は頭や目がすっきりしたといい、その後往診したところ、毎月の月経に発熱はなく、治療効果が継続して

いることが確認された。

本疾患の治療過程で、薬味を1つ加えるだけで治療効果に大きな違いが現れたことは、薬を選択することの重要性を物語っている。初診時には青蒿と黄芩を使って清熱したが、この2つの薬味は肝経に入ることはできるが、風火が肝経に沿って上昇するという証に対しては、釣藤鈎ほどの効力を発揮しない。釣藤鈎は平肝熄風して心熱を解除し、肝熱型の月経時発熱に強い効力を示す。李時珍『本草綱目』の釣藤鈎条にも、こう述べられている。「驚癇や眩暈は、みな肝風相火の病である。釣藤鈎は肝木から心包に通じさせるので、風は静まり火は消え、あらゆる証が自然に除かれる」。したがって釣藤鈎でなければ今回の成果はありえず、薬はすぐに反応が現れるようにしなければならない。

ただし釣藤鈎を使用する場合には、1つ注意しなければならないことがある。それは本品を20分以上煎じると、有効成分が次第に失われてしまうということである。したがって釣藤鈎は後から入れることが重要である。また使用量は12～24gが適当であり、重症の場合は30gを使う。少なすぎると、効果ははっきりしない。

2. 月経痛

月経痛は婦人科によくみられる疾患であり、そのほとんどが若い女性に発生する。なかには初潮を迎えると同時に発症する場合もあり、なかなか治りにくい疾患である。しかし治療法が適切であれば、効果が早いのもこの疾患の特徴である。以下に症例を紹介する。

■ 症 例 ■

患 者：黄〇〇，23歳，軍人。

合計4回の診療で、痛みは和らいだ。以下に4回にわたる診療経過を紹介する。

初診：1962年1月14日（1カ月目）

主訴：月経時に寒邪を感受したことから、月経のたびに激しい腹痛に襲われるようになった。月経は遅れがちであり、毎回激しい腹痛に襲われる。腰がだるい・出血量が少なくすっきり出ない・赤紫色の血塊が混じるなどの症状を伴う。月経が迫っていたので（1月14日）、すでに前兆症状がある。脈沈細で弦・舌苔薄白。

弁証：子宮の虚寒・衝任の気滞である。

治法：温経理気

処方：陳艾6g、製香附9g、当帰6g、続断9g、白芍6g、熟地黄9g、煨木香4.5g、台烏薬6g、川楝子9g、黄耆9g、肉桂2.4g

第2診：2月24日（2カ月目）。先月処方を服用したところ、月経時の腹痛は軽減した。今月は7日遅れて21日に始まったが、血塊は少なくすっきり出て、腹痛も半日だけで終わり、痛みも軽かった。治療効果が現れたものと思われる。

治法：前回の処方をもとに、養血温中・疏肝理気した。

処方：製香附9g、鬱金9g、丹参9g、陳艾9g、烏薬6g、川楝子9g、枳殼4.5g、熟地黄9g、陳皮6g、呉茱萸6g、白芍6g

第3診：3月22日（3カ月目）。第2診目の処方を服用したところ、小腹部が暖かくなった。今月は予定通り21日に月経が始まったが、腹痛はなく、胸悶・腰のだるさなどの症状も減少し、かなりよくなっている。

治法：疏肝理気し、治療効果を確実にする。

処方：製香附9g、陳皮6g、烏薬6g、枳殼4.5g、熟地黄9g、白朮6g、煨木香4.5g、川楝子9g、続断9g、狗脊9g、陳艾4.5g

第4診：4月21日（4カ月目）。治療後月経周期は正確になり、腹痛も減少した。今回も月経は予定通り始まるものとみられ、小腹部の脹満や下垂感などの前兆現象や、精神疲労がある。

治法：肝腎を調整し、脾胃を丈夫にする。

処方：当帰6g、白朮6g、白芍6g、製香附9g、続断9g、紫丹参9g、仙霊脾9g、巴戟天9g、製黄精9g、新会皮6g

予後：治療経過のうち、1カ月目は痛みが減少したが、疼痛はまだ2日間あった。2カ月目は、痛みが和らぎ、疼痛の期間も半日だけになった。3カ月目は、月経痛が治っただけでなく、月経周期も正常になった。4カ月目は、薬を服用後すぐに月経が始まったが、腹痛もなく、精神状態も良好であった。

月経痛は一種の自覚症状であり、月経時の腹痛を主訴とする。本疾患の病因には、虚実・寒熱のいずれもが考えられ、症状もまた複雑である。そのなかには乳房部の脹りを伴うものや、嘔吐を伴うものなどがあるが、一般には虚寒気滞型が多く、上記の症例もその1つである。月経時に冷たいものを飲む・雨に濡れる・寒邪を感受するなどは、いずれもこの疾患の原因になりうる。隋代の『諸病源候論』は、こう述べている。「女性の月経時の腹痛は、気血を労傷し体が虚弱になったときに風冷の気を感じ、それが胞絡に入り、……風冷が気血とぶつかり合っ、痛みを引き起こしたのである」。また宋代・陳自明の『婦人良方』は、こう述べている。「女性の月経時の腹痛は、風冷が胞絡衝任に入ることによって起こる」。このように、過労などのために体が虚弱になっている患者が月経中に寒邪を感受すれば、気血が滞って通じなくなり、月経痛を形成する。

本疾患を弁証すれば、寒証の月経痛の場合は、月経が遅れることが多い。経血はすっきり出ず小さな血塊が混じり、疼痛時には小腹部に虚冷感があり、温水を入れた袋を疼痛部に置くと気持ちよく感じる。このような症例には、艾附暖宮丸（『沈氏尊生書方』艾葉・香附子・当帰・続断・呉茱萸・川芎・白芍・黄耆・地黄・肉桂）を中心に治療する。温めれば通じるといふ法則にもとづいた処方である。黄耆・地黄は気血を補い、当帰は月経を調節し、続断は肝腎を調整し、香附子は理気行滞し、肉桂・陳艾は子宮を温め、気血の寒滞を温めて正常な運行を回復させる。通じれば痛まずとい

う法則通り、鬱滞していた経血や瘀塊がスムーズに出れば、月経痛は完治する。

月経痛の治療には、弁証分類をすることも大切だが、タイミングよく治療することも大変重要である。中医学では、最良のタイミングで薬を使用することの重要性を早くから指摘している。たとえば『素問』刺瘡篇はこう述べている。「およそ瘡を治すに、発するに先んずること食頃のごとくせば、すなわちもって治すべし。これを過ぐせばすなわち時を失うなり」瘡だけでなく、月経痛の治療もまた同様である。上記のような虚寒気滯型の月経痛の場合は、月経の初期段階で小腹部が冷痛し、経血がすっきり出ないときに薬を服用することが重要である。また寒証と瘀血型はどちらも気滯血瘀現象があるので、やはり月経の初期で、経血が渋滞し腹痛が強く、経血に瘀塊が混じっているときに薬を服用するとよい。一般に山楂子・枳殼・川芎・当帰尾・乳香・没薬・青皮・桃仁・紅花などの活血調経薬を服用し、経血がすっきり出ず腹が痛むという症状の原因である瘀滯を散逸させれば、経血も順調に出て、腹痛も自然に消滅する。

虚性の月経痛の場合は、気虚でも血虚でも、あるいは衝任の虚弱であっても、いずれも体が虚弱なために発生したものである。体の虚弱が本であり、月経痛は標である。『素問』陰陽応象大論篇に、「病を治すに必ずその本を求む」という原則が示されているように、本を治療するためには、普段から次のような薬を服用するとよい。気虚には人参・黄耆・白朮・茯苓、血虚には当帰・地黄・川芎・芍薬を使用する。衝任の虚弱には、紫河車・鹿角霜・巴戟肉・仙靈脾などの薬を服用する。そして蘇梗・陳皮・木香・砂仁などの行気醒脾薬で補佐する。身体が強壯になれば、必ずしも月経中に薬を服用しなくても、1回ごとに月経痛は軽減していき、やがて完治する。

月経痛を発生させるもう1つの重要な要素に、気鬱がある。治療法は上記と同様である。

3. 月経時の腹痛昏厥

月経痛の証候は、病因や体質によって違い、軽いものもあれば重いものもある。ここでは、重症の症例を紹介しよう。

■ 症 例 ■

患 者：王〇〇，23歳，医師。

主 訴：12歳で初潮を迎えたときから月経痛があったが、年を追うごとに痛みが激しくなっている。月経周期は短く、月経前には、気持ちが落ち込む・胸悶・脇脹・食欲不振・腰がだるい・帯下などの前兆症状が現れる。そして月経が始まれば、嘔吐したり下痢したり、痛みのあまり手足が痙攣し、昏厥して救急病院に送られたこともある。出血量は正常であるが、初期には小さな血塊が混じる。

1963年に診察を始めたときには、昏厥発作はすでに数回起きており、同時に月経中に赤や白の帯下があり、普段は白帯が多いという。脈細弦・舌苔薄白。

弁 証：肝鬱脾虚で帯脈が固摂作用を失ったための月経痛。

治 法：1. 月経前，前兆現象があるとき：疏肝和胃する。

2. 月経中：健脾束帯する。

処 方：2種類の方剤を処方した。

1. 月経前，前兆現象があるとき：製香附9g，鬱金6g，当帰6g，白芍6g，延胡索6g，烏薬9g，川楝子6g，浄乳没（各）6g，蘇梗6g，煨木香4.5g，焦山楂9g

2. 月経中：白朮6g，陳皮6g，茯苓9g，黄耆9g，当帰6g，薏苡仁12g，樗白皮9g，海螵蛸9g，仙鶴草9g，黒地榆12g，川柏6g

予 後：3カ月後，帯下は減少し，月経痛も以前より軽くなり，痛みのな